第7回DHCシンポジウム報告
「街づくりと地域冷暖房～21世紀の地域冷暖房」

去る平成12年11月21日（火）、東京国際フォーラムにおいて、当協会主催による「第7回DHCシンポジウム」が建設省の後援、（社）日本熱供給事業協会の協賛を得て、約150名の参加者のもと盛大に開催されました。
本シンポジウムは、平成6年の第1回開催以来毎年開催しているもので、今年で7回目を迎えます。今回は21世紀を目前に控え、これからの街づくりに地域冷暖房がどう関与していくべきなのかという観点から、タイトルを「街づくりと地域冷暖房～21世紀の地域冷暖房」として、落合副理事長による開会の辞の後、4名の講師の方からご講演をいただきました。

基調講演「地域冷暖房システムの今後のあり方」

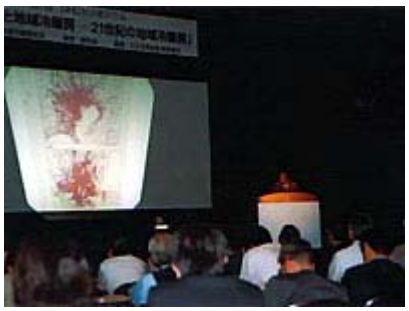
先ず、基調講演として、東海大学工学部教授の田中俊六氏より、地域冷暖房の特にシステム面を中心とした現状の課題と今後の展望についてご講演を頂きました。
最初にOHPを用いてCOP3以降の各国におけるCO2削減状況についてご説明があり、それを踏まえて、これからの地域冷暖房をはじめとするエネルギーシステムは、経済性のみならず高いエネルギー効率と温室効果ガス削減効果が求められ、特に地域冷暖房システムの個々の機器やシステムの総合エネルギー効率は、個別方式の機器と同様、トップランナー方式を取らざるを得ない、との指摘がありました。
また、電気式の地域冷暖房システムにおける一次エネルギー基準値の考え方や、冷凍機のCOP効率改善のあり方等についてお話しいただきました。
一方で、オンサイトのコージェネレーションシステムについては、ドイツの現状をご紹介いただき、現状の総合効率における問題点と今後の改善点についてご教授いただきました。
更に、今後の地域冷暖房のあり方として、環境保全型の地域冷暖房、本来の技術的な意味での電気とガスのベストミックス、ネットワーク型地域冷暖房などについて、ご提言いただきました。
そして最後に、21世紀は、国の省エネ政策の則って、10年先、20年先を見越した地域冷暖房システムのあり方を考えていかなければならない、と締めくくられました。

「都市整備の現状と課題」

続いて、建設省都市局都市再開発防災課建設専門官の武政功氏より、都市整備の現状と課題を中心にご講演をいただきました。
2001年1月の省庁再編により、建設省は国土交通省として衣替えする予定になっていますが、年内の取りまとめを目処に、都市局長の私的諮問機関として「市街地整備研究会」を組織し、20世紀の都市整備の現状と課題を踏まえて21世紀の街づくりがどうあるべきかという議論を行っているとのことで、その議論の内容を一部ご紹介いただきました。
先ず、東京を例に挙げ、都市整備の歴史的経緯について御説明いただきました。戦災復興から高度経済成長を経て現在に至るまでの間、急激な都市化の進展に都市整備が追いつかない現象が様々な点で見受けられるようになり、例えば23区の縁辺部において木造密集市街地が発生し、防災上大きな問題点になっている状況などをご指摘いただきました。
その他にも、現状の都市整備の問題点として、CO2排出量の増大、市街地縁辺部で公共交通機関や環状道路の整備が追いついていない現状、都心における夜間人口密度の低さ、バブル期の後遺症として都心周辺部に地上げによる空地が拡大した点など、先進諸国の他の都市（ニューヨーク、パリ、ロンドン等）との比較も交えてご指摘いただきました。

また、地方都市においても、都心部での空閑地の拡大、都心人口の減少、都心商業地の空洞化等の現象が見られ、福祉施設の立地状況を見ても、駅周辺部にはほとんど存在していない現状を見ると、これからの高齢化社会においての課題となる点など、明快にご指摘いただきました。

こうした現状の課題を踏まえて、前述の市街地整備研究会において、今後の街づくりのあり方はどうあるべきなのかが鋭意検討されているとのことでした。また、政府が提唱している日本新生プランにおける4つの柱の内、地域冷暖房は「環境」と「都市基盤整備」の双方に係わる重要な位置づけを担っており、今後の一層の発展が望まれるとして締めくくられました。



「東京都における地域冷暖房導入の現状と課題」

続いて、東京都環境局環境改善部計画課長の柿沼潤一氏より、上記のテーマでご講演いただきました。

先ず、東京都における地域冷暖房導入推進の経緯をご紹介いただき、都の地域冷暖房計画区域指定対象の分布状況についてデータのご紹介がありました。平成12年8月現在で70区域あり、全国の半数を占め、またその中でも約50%が千代田区、中央区、港区に存在しているとのことです。更に詳細な区域指定件数の推移や対象建物数、延床面積数の推移をグラフで分かり易くご紹介いただきました。

一方、地域冷暖房方式と個別冷暖房方式でのNOx排出量における比較検討結果をご紹介いただき、この点でも地域冷暖房方式の方が排出量で下回っている点、また、最近では個別冷暖房方式との差が小さくなっている点、個別冷暖房方式においてもボイラーの複数化の傾向がある点などをご説明いただきました。

東京都としては、今後も地域冷暖房導入を積極的に推進していく事は勿論のこと、NOx排出量の比較にも見られたような都が保有する様々なデータを積極的に民間に公開し、活用していただく事で、より良い街づくりやエネルギーの有効利用、地域冷暖房の更なる発展に寄与することが行政としての責務であると締めくくられました。

「21世紀の都市のあり方～消費生活者・女性の視点から」

最後に、青森大学社会学部教授の見城美枝子氏より、上記のテーマでご講演いただきました。

フリーのジャーナリスト・エッセイストとして活躍する傍ら、建築学をご専門にされているお立場から、先ず、日本の建築は古来大陸から文化を積極的に取り入れていながら、それで終わらずに、日本人独自の感覚・風土に馴染む建築技術を産み出してきた、と指摘、ただ、明治以降は西洋の建築文化を取り入れてきたが、それを日本独特のものにするという志が最近は感じられないとし、資源の枯渇が懸念される21世紀においては、従来の住空間のあり方に再度、知恵を絞るべきであると指摘されました。

また、飛騨高山の合掌造りの家やヨーロッパの文化の原点と言われるフランドル地方の住空間をビデオや写真でご紹介いただき、このような例で既に用いられているような、あらゆるものを有機的に使っていく知恵が21世紀にも必要になると指摘されました。

一方で、今後21世紀において何を住空間の心地よさの要素として捉えるか、例えば、光、風、水、空気、匂い、色、音、体感温度などを挙げられ、それらをどう建築設計上取り入れていくかという点が重要であり、またこれからの都市は地域冷暖房も含めて、高齢者や女性に充分配慮したものにしていただきたい、との期待を表明して締めくくられました。

最後に当協会の前島専務理事より閉会の辞が行われ、21世紀を目前にした第7回DHCシンポジウムの幕を盛況の内に閉じることが出来ました。